論文

創設期の専門職短期大学における教育・学習実態
—— 学生の能力認識と臨地実務実習のインパクト ——

Educational Practices and Learning Outcomes in the Founding Phase of Professional Vocational Junior College
——Students' Perceptions of Competence and Impact of On-site Practical Training——

小方　直幸 , 立石　慎治 , 谷村　英洋
Naoyuki OGATA, Shinji TATEISHI, Hidehiro TANIMURA

本研究は，創設期のせとうち観光専門職短期大学における教育・学習の実態を３年間にわたる学生パネル調査を通じて明らかにすることを目的とし，特に学生の能力認識の変容と臨地実務実習のインパクトに焦点を当てて考察したものである．分析の結果，以下の３点が明らかとなった．第１に，個人の変容ではなく集団として見た場合，学年進行に伴い学生の学習熱心度や科目満足度が維持・向上する傾向を確認できたが，一部の学生では満足度の低下も見られた．また，学習成果を評価する際には，教育効果でもある学生の評価に対する認識基準自体の変容も考慮する必要性が示唆された．第２に，学生の能力実感は一方向的な向上や変容を示すわけではなく，揺らぎが見られた．「将来の職業分野が抱える課題をみつける力」は教育課程の影響を受けやすいのに対して ,「自己を理解する力」「キャリアをプランニングする力」は，学習や就職活動の経験を通じて自己評価基準も再構築されるため，複雑な能力認識の変容が確認された．このような複雑性を踏まえた指導が求められる．第３に，臨地実務実習は学生にとって職業理解を深める貴重な機会を提供し，特に長期の実習は，学生が迷いや不安も経験しつつ，キャリア選択を具体化する場として機能していた．一方で，実習内容と大学教育の連動性も含めた指導内容や体制のさらなる充実の必要性も明らかとなった．

キーワード : 専門職短期大学，学生パネル調査，能力の自己認識，臨地実務実習
Keywords: professional vocational junior college, student panel survey, self-perception of competence, on-site practical training

1　研究の目的

本稿は，せとうち観光専門職短期大学を対象とした３年間のパネル調査を通して，創設期における学習・教育の実態を，学生の視点から明らかにすることを目的としている．2019 年に，質の高い実践的な職業教育を行うことを目的に発足した専門職大学・専門職短期大学制度が始まった．2024 年時点の設置校数は大学が 20 校，短期大学が３校である．短期大学はヤマザキ動物看護専門職短期大学，静岡県立農林環境専門職大学短期大学部，そしてせとうち観光専門職短期大学が設置されている．学校基本調査によると，2023 年の短期大学の専門職課程の学生数は 542 人である．ほとんどが農業系（497 人，92％）で，社会科学系は 45 人，8％となっている．短大の全学生数に占める比率はごくわずかの 0.6％に留まる．

専門職短期大学を扱った研究は，制度発足後間もない時期ということもあり，限定的である．専門職短大を含む専門職大学の教職員組織と教育課程の整理を行った小方・谷村・立石（2021），小方・立石・谷村（2022）と，動物看護職を希望するか否かで２グループに分け，職業意識や希望職種を考察した山川・大橋（2022，2023）がある程度である．また限られた既存研究が，主に教職員組織，教育課程の構造や動物看護職に焦点を当てているのに対し，本研究は学生視点から３年間にわたる教育・学習の実態を記述・考察するものである．そのため，1 短期大学の限られた事例考察に留まるものの，創設期の専門職短期

大学の教育・学習の実態を明らかにしている点で意義があり，専門職短期大学に関わる制度設計の在り方や教育プログラムの改善・評価に資する分析枠組みや考察結果を提供できると考えている．

なお，次節で紹介するように学生調査の項目は，展開科目，総合科目といった科目名称や臨地実務実習という専門職大学制度に固有の文脈を踏まえた設問を除き，東京大学大学経営・政策研究センターが 2018 年に実施した第 2 回全国大学生調査等に依拠した構成としている．これは，本稿では言及する余裕がないが，既存の大学生調査との比較も行える点を重視したからである．また観光に関わる専門職養成に特化した設問も設けていない．これは，他の専門職大学・専門職短期大学も含めて調査を実施しているためである．観光分野の学生に着目した研究は，観光学部 1 年生のキャリアデザインの考察や，同じく 1 年生に着目しせとうち観光専門職短期大学生との進路展望を比較した研究（濱島 2024a，b），観光系大学の学生における入学前後の観光産業へのイメージを検討した合田（2024）等があるが，例えば 4 年制の観光学部の教育・学習との比較検証を念頭においた設計とはなっていない．

以下 2 節では，調査の方法・内容に加えて，学生からみた教育・学習の状況を，特に 3 年間の変化に着目して素描する．続く 3 節では，授業経験を通して得られた学生による能力評価の変遷と最終的な進路状況の関係を明らかにする．4 節では専門職大学制度の目玉ともいえる臨地実務実習の経験について，調査票に加えて別途行ったインタビューも含めた考察を行う．

2　調査の方法・内容と結果の概要

2022 年に入学した学生から調査を開始し，同一の調査対象を 3 年間追いかけるパネル調査で，対象は在籍学生全員の全数調査である．1 年生調査は 2022 年の 2 月 9 日～ 2 月 21 日にかけて，2 年生調査は 2023 年の 3 月 23 日から 4 月 13 日にかけて，そして 3 年生調査は 2024 年の 1 月 25 日から 2 月 16 日にかけて実施した．また 2 年生に対しては 2023 年の 11 月 10 日から 11 月 25 日にかけて，臨地実務実習の経験を中心に尋ねるインタビュー調査も行った．

調査の大枠の設計は図 1 のようになっており，①入学，②授業内外の取組状況，③提供授業と自己評価，④学習成果と進路，そして⑤総合満足度という大きくは 5 つのパートから構成される．①は 1 年次のみの調査，②～⑤の設問の多くは 3 年間同じ設問項目で実施した．なお，②の臨地実務実習の経験は 2 年次のみの調査，同じく②の授業外での取組は 2 年次と 3 年次の調査，そして④の進路と就職活動は 3 年次のみの調査となっている．

以下では，3 節と 4 節では十分に触れられない点に関して，主として 3 年間で回答傾向に変化の大きかった設問に着目し，結果の概要を記述しておく．また 3 年間の変化がほとんどなかった設問についても適宜言及する．なお，3 節と 4 節では同一人物の 3 年間の変容を考察しているのに対して，ここでは各年次の平均値や傾向の比較を行うに留まり，パネルデータの強みである同一人物の追跡という観点は活かしきれていない点を予め断っておく．

まずは，②授業内外の取組状況の領域である．職業専門科目，展開科目ともに，何れの学年でも「とても熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」という回答が 9 割を超えている．また，学年が上がるほど「とても熱心に取り組んだ」の割合が高くなり，特に 3 年次の変化が大きい（それぞれ 25.0%⇒ 33.3%⇒ 58.3%，16.7%⇒ 16.7%⇒ 41.7%）．科目種別にみた満足度も，熱心度

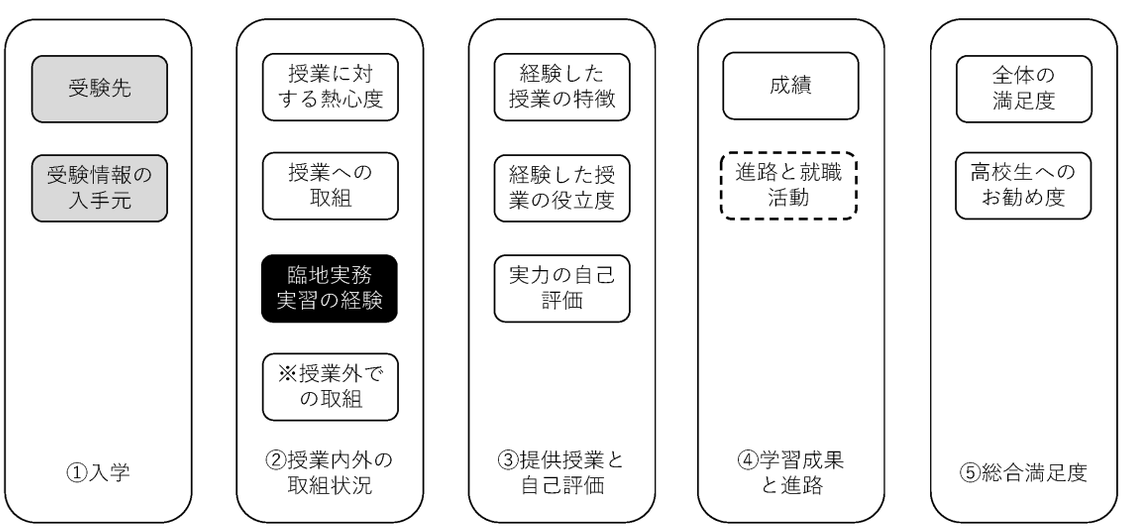

図 1 ：調査設計の概要

の変化に対応して「とても満足している」の割合が高くなっている（職業専門科目 8.3％⇒ 16.7％⇒ 41.7％，展開科目 8.3％⇒ 8.3％⇒ 25.0％）．3 年生は就職を決める時期，かつ学習も 3 年間の集大成を行う時期であり，最終年次の取組熱心度や取組満足度が上がる傾向にある点は望ましい．なお取組満足度については，一部の学生で 3 年次に低下が生じている点には留意もいる．

続いて③提供授業と自己評価の領域である．まず授業経験について肯定的（「よくあった」「ある程度あった」）な評価が学年を問わず 8 割以上と高かったのは，「理解しやすいように工夫されている」「出席が重視される」である．一方で，否定的（「あまりなかった」「ほとんどなかった」）評価が学年を問わず 4 ～ 5 割と高かったのは「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」「予習・復習が必ず求められる」であった．なお，「授業内容に興味がわくよう工夫されている」「理解がしやすいよう工夫されている」は「よくあった」と回答した割合が，学年が上がるほど高くなっている（何れも 8.3％⇒ 25.0％⇒ 41.7％）．制度創設期の教育・学習という点を考えると，学生は学び方，教員も教え方等について経験を重ねた成果の現れとも考え得る．また 1 年次で「グループワークなど，学生が参加する機会がある」に肯定的に回答した割合が少ないのは（50.0％⇒ 91.6％⇒ 83.4％），コロナ禍の影響も反映した結果と考えられる．

一方で，授業の役立ち度をどう考えているかについては，「将来の職業分野が抱える課題をみつける力」を除き，むしろ学年が上がるにつれて評価が低下する傾向にある．役立つ授業が減ったと捉えることも可能だが，3 年次の教育課程の構成の影響も考え得る．「外国語の力」「幅広い知識，ものの見方」の肯定的（「役立っている」「ある程度役立っている」）評価が，学年が上がるにつれて低下するのも（それぞれ 58.3％⇒ 50.0％⇒ 41.7％，91.6％⇒ 83.3％⇒ 75.0％），教育課程の構成を反映した結果と考えられる．

実力についての自己評価も興味深い回答傾向を示す．「相手にわかりやすく話す力」と「自己を理解する力」「外国語の力」は，学年が上がるにつれて高くなる（それぞれ「十分」「ある程度十分」という肯定的評価が，16.7％⇒ 33.3％⇒ 58.3％，41.6％⇒ 58.3％⇒ 66.7％，25.0％⇒ 33.3％⇒ 58.4％）．外国語については授業の役立ち度とは逆の結果が得られた．その他の多く項目は，1 年次から 2 年次にかけて評価が上がり，3 年次に評価が下がるという逆 U 字型になっている．数値の変化をそのまま率直に受け止めるならば，実力がついていないという解釈もあり得るが，むしろ実習や就職活動，卒業研究の経験を通して，より客観的に自身の実力を捉えることができるようになった，つまり学生の中で評価の基準自体が変化した結果の現れとも解釈し得る．

最後に⑤の総合満足度の領域である．まず各年次を振り返っての満足度であるが，「とても満足している」と「ある程度満足している」という肯定的評価は，1 年次から 2 年次にかけては 66.6％から 91.7％に上がるが，3 年次に 75.0％に下がっている．一部の学生の満足度が高くないのは，就職等の結果が影響している可能性もある．また観光を学ぼうとしている高校生に勧めるかという問いに関しては，「とても勧める」と「ある程度勧める」という肯定的評価が，66.6％，58.3％，58.4％であり，1 年次の水準を上回ることができていない．自身の満足度と比較した際の評価も厳しい．先輩がいない中で過ごしたことや，入学直後はコロナ禍での学生生活を強いられた，ある種特殊な環境下での 3 年間であったことも，この結果に反映されているのかもしれない．また自分にとってはよいものの，誰にでも勧められるわけはないと考える層が一定程度いることを示唆する結果でもある．

3　自らの実力に関する実感の変遷と就職先に対する認識

上述のとおり，学生総体で見れば，実力に関する意識調査の結果には変化が見える．では，学生個々人で見たとき，専門職短期大学で学ぶ過程で自身の能力についてどのように実感が変化するのだろうか．また，その能力を生かす場である就職先についてどのように受け止めているのか．本節では 3 時点の質問紙調査のデータから整理する．

3.1　自分の実力に対する評価と就職先を見る枠組み

3 年間に渡る本調査では，全 3 回で各種の能力について，授業が役に立ったか，そして，自分の実力はどうかを尋ねている．後者については，さまざまな能力を計 12 項目[1)]にわたって自己評価してもらったが，本節ではそのなかから，「自己を理解する力」，「将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」，「自身のキャリアをプランニングする力」の 3 つを取り上げる．その選定理由は，「自己を理解する力」が文字通り自身に関わること，「将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」が専門職として参入しようとしている業界に関すること，そして，「自身のキャリアをプランニングする力」は理解した自己と参入する業界の双方の理解に基づいて発揮されるものと考えたためである．

本節では，分析の際に一工夫を行いたい．多くのケー

スでは，3時点分の帯グラフなどを並列に記述して解釈することと思われるが，今回はサンプルサイズが12と限られているため分布を細かく見ていくには限界がある．また，サンプルサイズに鑑みれば多変量解析にも馴染まない．そして，本調査はパネルデータとなるように設計されているため，個々人を単位として3時点の結果を関連付けた記述が可能である．したがって，以上の3点に鑑みた可視化による分析を行う．

3時点を関連付けた記述とはどういうものか．各項目の選択肢は「不十分」,「やや不十分」,「ある程度十分」,「十分」の4つであるため，仮に「十分」,「ある程度十分」を肯定的,「不十分」,「やや不十分」を否定的と考えると，個人の能力実感は以下のようパターンで推移していくはずである（図2）．

3年の間で学生はさまざまな経験をするが，だからこそ3回の調査では「ゆれ」もありうる．つまり，肯定的に捉えていたのが否定的に転じることもあれば，更に肯定に転じなおすこともありうる．逆に，否定的に捉えていたのが肯定的に転じることももちろんありうる．一貫して肯定的あるいは否定的であるとは限らないはずである．もちろん，4件法で尋ねているため，推移パターンは細かくなるが，論理的には上記のようなパターンに収斂する．特に，今回注目する「将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」は，学習が進めば肯定的な評価に転じやすいと想像されるが，「自己を理解する力」や「自身のキャリアをプランニングする力」は学習経験によってその参照点が変わりうることを考えると，必ずしも学年進行とともに伸びていくとも思われない．もし「自身のキャリアをプランニングする力」が自己と環境の双方の理解に支えられながら伸びるものだとしたら，その自己認識の推移は多様でありうる．

こうした想定を置きつつ，沖積図（alluvial diagram）を用いて能力の自己認識の推移を可視化する．沖積図とは，複数の質的変数にかかる回答の組合せを可視化する手法で

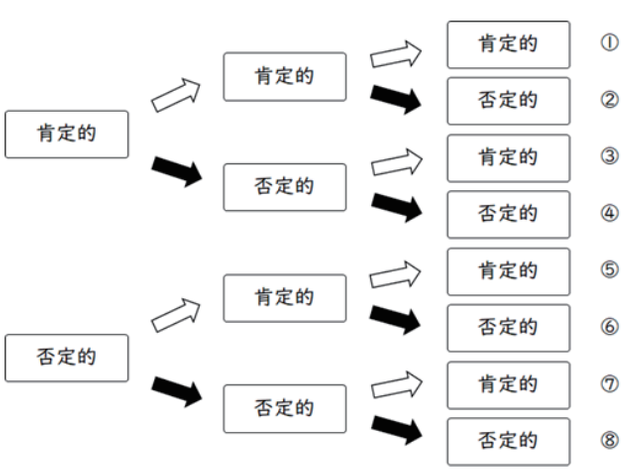

図2：想定される能力実感の推移パターン

ある．今回のような，調査時点は異なるが同一の設問への回答に適用した場合，ある項目に対する回答内容がどのように推移したかを示すことができる．このグラフにあてはめ，自己認識の変遷を捉えることとしたい．

加えて，こうした実力を何のために培うのかを考えれば，それは就職後にそれらの能力を発揮して職場での役割を果たすためであろう．そこで，沖積図には，別の設問である卒業後の就職先（内定先）について「在学中に学んだことを活かせる職場か否かを重視して選んだ」に対する回答も組み合わせることとする．

本稿で別途示すとおり，学生は多様な経験をするなかで，半ば強制的に自身が抱いているさまざまなイメージを刷新していく．そのため各種の能力への自己評定はさまざまな変化を見せると推察されるが，こうした実感がキャリア上の重要な選択である職場選びにもどう関わりうるかを以下，確認する．なお，次項で示す結果はこのコーホートで起きたことである．別の入学年次の学生や他の専門職大学等にも当てはまる予測の直接的な示唆が得られるわけではない．むしろ，今後の検証課題の候補を挙げるものとして捉えるべきと考える．

3.2 自己の実力と就職先の選択にかかる分析の結果

結果は，図3に示すとおりである[2)]．なお，色分けは第1学年の回答結果に基づいて塗分けている．また，図3はn＝12であるが，一部の設問には無回答が含まれるため，n＝12ではない箇所もある．大まかな傾向として，図3の①や⑤，②，⑧のパターンのケースが表れている．

「1. 自己を理解する力」（図の左上）を確認すると，入れ替わりが起きたことが見て取れる．第1学年で「十分」と答えた者は，その後「不十分」に転じ，その後も肯定的な回答はしていない．翻って，第1学年で「不十分」と答えた者はその後肯定的な回答に転じて，学びを活かせる職場へと就いている．先述のとおり，自己認識はカリキュラムによって影響を受ける可能性がある．単調に伸びていくものでも決してなく，むしろカリキュラムのインパクトがあるからこそ自己理解が揺れてしまうことも生じる．「将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」や「将来の職業に関する知識や技能」，今回は言及していないが，「専門分野の知識・理解」のように，必ずしも積み上がっていくとは限らない能力については，知識・技能とは違ったカリキュラムでの伸ばし方を想定する必要があるかもしれない．

「2. 将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」（図

の右上）を確認すると，第 1 学年から「不十分」と回答している場合，例外もあるが，年次進行があっても第 1 学年のときと同様に否定的な回答が続き，最終的に就職先も学んだことを活かす職場ではないと回答している．他方，第 1 学年の際に「やや不十分」や「ある程度十分」のいずれかである場合，最初が「やや不十分」であっても第 3 学年で「十分」と答え，学びを活かせる就職先かに「よくあてはまる」と回答するケースも見受けられる．なお，図からは割愛しているが，この傾向は「将来の職業に関する知識や技能」に対する設問の回答とも類似している．設問の表現からして，これらの知識や能力は，自律的に学習するものというよりは，専門職短期大学から提供される学習機会を通じて培われることが多いと想定すると，カリキュラムの影響は大きいと考えられる．その傍証は，第 2 学年の段階で多数が「ある程度十分」と答えたことに見出される．将来の職業分野の学習が進んだことによる回答傾向が表れているように見て取れる．だからこそ，カリキュラム外でリカバリーする手段がなければ年次が進行するにつれて逆転することが難しくなると推察される．このことの帰結は，第 1 学年での学習が重要となることである．少なくとも，このコーホートに対しては，第 1 学年の際に「将来の職業」に関する知識や展望等については「やや不十分」以上に獲得実感があるかどうかが，重要な分かれ目になったことが示唆される．

「3．自身のキャリアをプランニングする力」（図の左下）を最後に確認すると，興味深い推移をするケースが散見され，ずっと「ある程度十分」を選択し学びを活かせる職場かに「ある程度」又は「あまり」と回答するケースが見受けられる．すなわち，肯定的な回答であるが，「ある程度」と留保がついていると，最後の学びを活かせる職場かという問いに「よく」と回答しているケースが一人もいない．むしろ，当初「やや不十分」と答えていた者がその後肯定的になっていき，学びを活かせる職場に就職している構図となっている．なお，第 1 学年で「不十分」と回答した者はその後も否定的な回答が続いている例外もあるが，今後を展望する力である「自身のキャリアをプランニングする力」は初期段階の肯定感が続くとは限らず，必ずしも当初から高い必要はないとも考えられる．

3.3　小括

本節では，専門職短期大学に学ぶ学生から 3 年間に渡って協力を得たパネル調査のデータを用い，能力実感を記述した．その時々に答えてもらったことから，回顧式よりは各時点のスナップショットとして実感を捉えているものと期待される．また，キャリア形成が自らの役割を価値づける側面を含む以上，あくまで学生の実感ではあるが，だからこそこの推移には意味がある．

改めて結果を示すと，専門職として必要となる知識・能力については，第 1 学年で獲得実感を持たせられているかが重要な着眼点として示唆された．他方で，キャリアプランニング能力や自己理解能力については，知識・技能

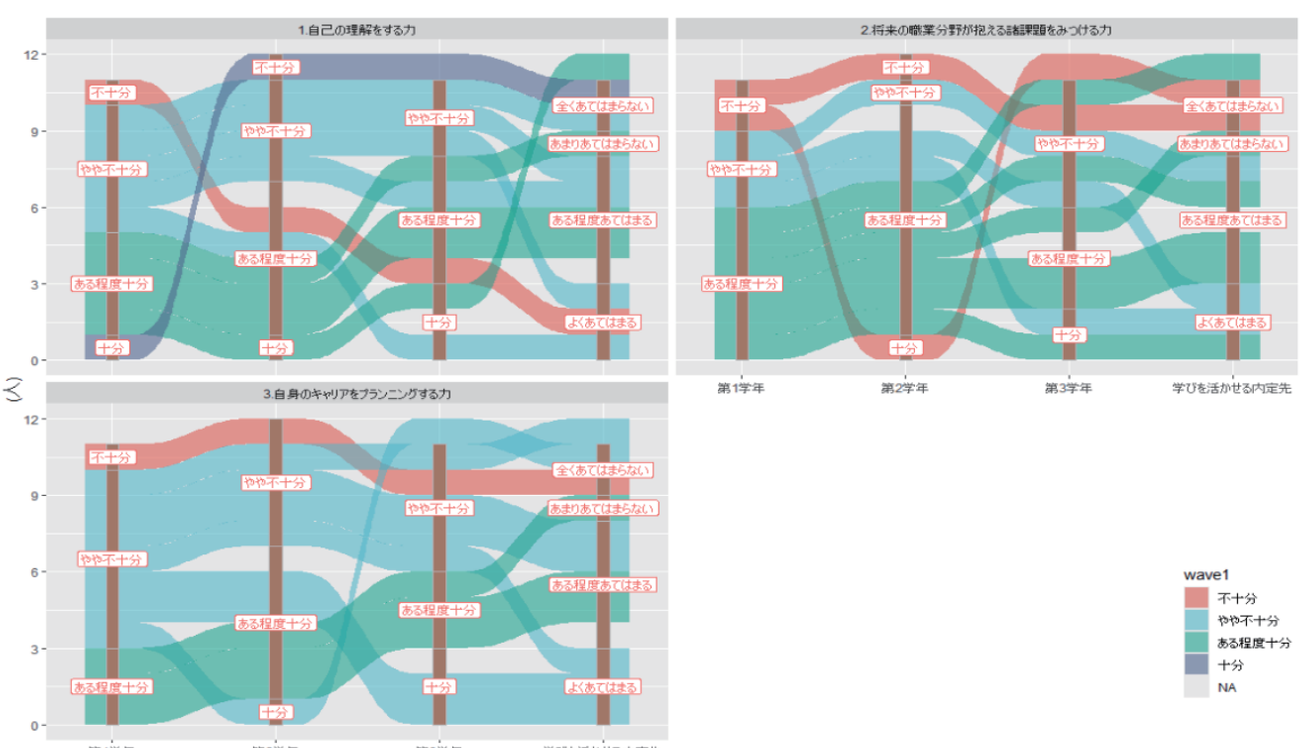

図３：沖積図

に比べれば，その時々で捉え方が変わる可能性がある．専門職として必要となる知識・能力も，キャリアプランニング能力や自己理解能力も，いずれも長い専門職としてのキャリア形成でその後も伸ばしていくべきものである．しかしながら，繰り返しになるが，キャリア形成が自らの役割を自ら価値づけていく側面を含む以上は，学生がどれほどそうした知識や能力を身に付けてきたか，また，それを自覚できるかは重要な教育課題のひとつでありうる．今回のデータは，各機関が身に付けさせようとしている知識や能力がどのような性質のものであるかに応じて，把握の仕方やカリキュラムを通じた伸ばし方を工夫する余地がある可能性を示唆している．こうした点は今後の研究課題である．

4　臨地実務実習への取組みと評価

本節では質問紙調査とインタビュー調査のデータを用いて，学生の実習科目への取組みと１年，２年，３年の各段階における評価を分析し，専門職大学・専門職短期大学制度の大きな特徴である長期の実習科目が，当該専門領域の中で進路・就職先を見定めていく過程でどのような働きをしていたかを明らかにする．

4.1　臨地実務実習Ｉへの取組みと評価

まず，臨地実務実習を中心とした実習・演習の多さは，進学選択の段階から意識されていた．１年次調査では「実習・演習が豊富に提供されていることが進学の決め手になった」かどうかを聞いている．「よくあてはまる」「ある程度あてはまる」がそれぞれ 41.7％，「あまりあてはまらない」が 16.7％で「全くあてはまらない」はいなかった（n=12）．入学者の多くは実習・演習の比重が高いカリキュラムに魅力を感じていたと言える．

では，入学後最初に履修する臨地実務実習Ｉ（以下，実習Ｉ）に対する振り返りを，１年次調査の結果から確認する．ただし，１年次調査では臨地実務実習のみを対象とした質問はなく，参照できるのは「実習・演習・臨地実務実習」と一括りにした質問に限られる（以下，実習・演習）．図４より，ほとんどの回答者が熱心に取り組み（A），経験･学習した内容に満足していることが分かる（B）．実習･演習の成果としては，学習意欲を高め他の学習を促すきっかけになった点が支持され（C），自分の適性の理解につながった点もおおむね支持されている（D）．

インタビュー調査は２年次秋に行われたため実習Ｉに関する語りは多くはないが，どのような振り返りがあったか整理する．一人一人の経験の詳細を明らかにすることは難しいが，個々の学生の発言の断片を集めることで，実習Ｉの意義や可能性の広がりをつかむことができる．

実習Ｉについて「楽しかった」「学びがあった」と総括して肯定的に語る学生がほとんどだったが，その内実にはいろいろな側面がある．インタビューデータからは，表１で示したＡからＧの意義が見出された．まず，実習Ｉを履修するまでアルバイトも含め一切仕事をしたことがなかったという学生も少数だが存在する．そのような学生にとって，実習Ｉは初めての観光業界体験というだけでなく，初めての仕事体験でもあり，まさに職業キャリア形成の起点となっていた（A）．そして，実習Ｉはすべての学生に対し初めて観光業界を内側から知る経験を提供する．学生がイメージできる観光業は消費者としての経験に基づいており非常に狭い．それを全く逆の立場から知り学ぶ体験を通して，観光の仕事の現場を理解していく（B）．接客についてもそれを受ける消費者としてではなく，接客を“する”側の立場で経験しなおす中で，観光業界における接客の楽しさや喜びを知っていく（C）．また観光業界として認識されにくい実習先を選択した学生たちは，実習を通して観光や観光業界の捉え方を拡張していた（D）．

実習先によって従事する内容は様々だが，学生が高いハードルを感じる場合もある．Ｅの例のように，覚えることが多く余裕がないなかで，実習先担当者が打診してくれた受付業務を引き受けることができなかったというケースもある．また，接客や他者とのコミュニケーションが頻繁に求められるなかで，人見知りの性格や，コミュニケーションに積極的になれない自分自身に向き合わざるを得ない場面も出てくる（F）．そのようななかで学生たちはできるだけの努力をしながら，自らの適性や自分に合った仕事とはどのようなものかを考えることになる．

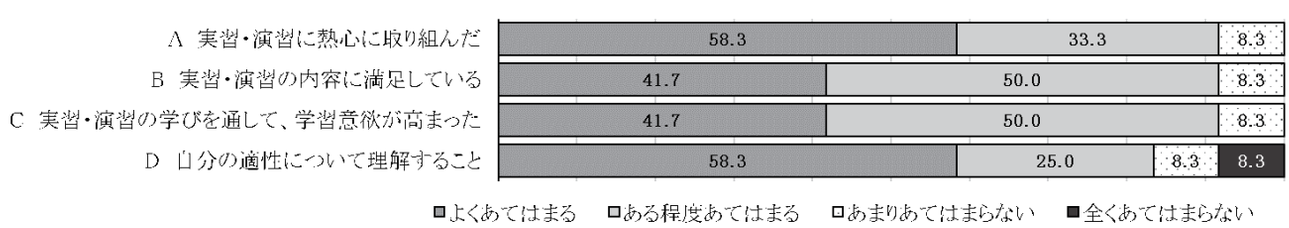

図４：１年次の実習・演習における取組みと評価（%，すべて n=12）

最後に，実習の場は多様な人との出会いの場でもある（G）．観光業界が多様なものである以上，そこには多様なバックグラウンドの人たちがつながっている．学生がそのような人々と出会い交流することは，観光人材としての成長だけでなく，社会人としての視野を広げるという成長にもつながると考えられる．

4.2　臨地実務実習Ⅱ・Ⅲ終了後の評価

では実習Ⅰからおおよそ半年後の実習Ⅱと２年次末の実習Ⅲも終えた段階で，臨地実務実習全体を学生はどのように振り返っていたのだろうか。２年次の年度末３月下旬に実施された質問紙調査の結果から抜粋して記述する（図5）．まず希望の実習先で実習ができたか（A），関心のある業務の体験ができたか（B）という点では大多数が肯定的である．特に肯定度が高い「よくあてはまる」は全体の３分の１,残り３分の２弱は「ある程度あてはまる」であった．否定的な回答もあるが少数である．また実習の機会は就職先を検討すること（C），自分の適性を理解すること（D），働き方や生き方について考えること（E）にもつながっている.これらの中で適性を理解することについては，否定的な回答が４分の１と相対的に多い．実習以外の授業で学んだことが実習中に使われているかという点でも，肯定的な回答は６割程度と低い（F）．Fの結果は、実習先によって，大学での事前の学習事項と実習中の経験の関連性が不明確になりうることを示唆している．そのような場合，実習での学びとキャンパスでの学びの連携は，実習が終わった後の事後学習や，後続の学期の学習に期待されることになるだろう．

G，H，I，Jは実習に関する指導や助言に関する項目への評価である．このなかで実習前の直前指導について否定的回答が多くなっている（G）．図に含まれていない質問で，「各実習先で経験できる業務内容に関する情報の提供」に満足しているかを問うたものがあるが，こちらの回答も「とても満足している」が 16.7%，「ある程度満足している」が 41.7%，「あまり満足していない」が 25.0%，「全く満足していない」が 16.7%で否定的な回答が４割を超す（n=12）．インタビューでも，従事する業務について実習先に行って初めて説明を受けたという事例が少なくなかった．完成年度を目指して，同短期大学が初めての臨地実務実習を作り上げながら運営していたという事情が背景にあったのかもしれない．またインタビューの際，実習中の大学による指導・助言は限定的だったと話す学生が多かったが，そのことがHのやや否定的回答の多さにつな

表１：学生の語りから見出された臨地実務実習Ⅰの意義

		具体的な語りの例
A	働くということに足を踏み入れる	「私は1年生のときの実習行くまでどこかで働くという経験がなくて，アルバイトもしたことなかったので，なんか全て新しくて」
B	それまで見たことがなかった観光の仕事の現場を知り体験する	「いや，もうその全ての工程を見れたのが初めてだったので，大体私が見ているのが最後の販売の.（買う所だけ？）そうです．なんですけど，買うまでの工程見れたのはすごく面白かった．」 「（空港の仕事の見えてなかった部分が分かった？）そうですね．1回目でだいぶ，あ，こんな感じなんだって．」 「裏方の仕事ってどんなんやろうというのを調べるのに対して，商店街ってもろに裏の仕事が分からない．そこにちょっと興味が湧いてみたいな．」
C	接客の楽しさや喜びを感じる	「実際仕事をやってみて，売る仕事，お客さんと直接会って話して売る仕事がすごく楽しかったなという感じで．」 「でも，ホテルも楽しそうに終わりました．お客さんも嬉しそうな顔をするし．　困ってる人に声かけたら，「本当に助かりました」みたいな感じで．」
D	観光の概念を拡張する	「（美術館を実習先にしたことについて）特殊なほうを選んで良かったと思いました．（中略）これは観光に関係するんだなと思って，いろいろできて良かったと思いました．」
E	仕事の難しさに直面する	「受付を実際にやってみようという話もあったんですけど，全然覚えられなくて，量が多すぎて，仕事.（中略）本当に仕事の量が多くて．チケットも一緒に販売してるんですよね，そこで．チケットの種類が4種類ぐらいあって，こんな覚え切れるわけない．（中略）あと受付だけじゃなくて，フロントというか，その周り，ホールにいるお客さんにも目を配ってて，困ってる人がいたら声をかけて．周りを見る力も必要だなって．」
F	自己と向き合う	「はい，結構，人見知りです．（接客業は結構しんどい？）そうです．一応バイトで接客業はしているんですけど，自分から何か積極的に向かっていくというのは．（中略）得意じゃない．」 「なんか実習，1年生のときの実習に入ってから，いろいろな人としゃべる機会が増えて，そこから就職に向けていろいろなことをやってみようかなという気持ちが．（中略）前はそうですね．あんまり自分から話に行くのが．（中略）苦手だったんですけど．」
G	現場で働く多様な人とつながる	「学芸員の方とも仲良くなれたから，すごいお話聞くのも楽しかったし．（中略）学芸員もちょっとなりたかったから，こういう感じでなったよとか，あとは司書の資格を持っている方もいて，私，本が好きだからその人と本の話とか．」

がっているのかもしれない．他方，実習先の指導・助言については肯定的に捉えている学生が多く，「よくあてはまる」の割合は 50.0％と高い（I）．専門職大学・専門職短期大学の教育にとって，外部の実習先の協力や，実習全般をコーディネートする大学側の取組みが重要であることを改めて実感させる結果である．なお，実習後の指導（J）については実習前の指導（G）と大きくは変わらない回答分布となっている．

4.3　臨地実務実習および決定進路に対する卒業直前期の評価

実習Ⅲが終わってから約 1 年が経過し，卒業を控えた 3 年次 2 月中旬の段階で，12 名の調査回答者のうち 11 名は民間企業に正社員として就職することが決定していた（表 2，D）．調査時点で進路未定者は 1 名であった．就職が決定した者のうち 9 名は就職先が観光関連であると回答し(E)，3 名は臨地実務実習の実習先に内定していた(F)．後者は臨地実務実習が就職先の決定に直接寄与しうることを示している．就職先への満足度（G）は，「決まった就職先（内定先）に満足している」に「よくあてはまる（◎）」が 45.5%，「ある程度あてはまる（○）」が 36.4%，「あまりあてはまらない（△）」が 9.1%，「全くあてはまらない（×）」が 9.1% で，8 割は一定の満足感をもって就職を決めている（n=11，進路未定者は除く）．全員内定・全員満足とはいかなかったものの，ほとんどの学生を，観光関連企業を中心に正社員として送り出すことができていた．

これらの進路が確定するまでの過程で臨地実務実習はどのように貢献したのだろうか．3 年次調査では進路や就職先を「考える」上での影響と「決める」上での影響について尋ねている．考える上では，「影響があった」に「よくあてはまる（◎）」が 50.0%，「ある程度あてはまる（○）」が 50.0% で，全員が肯定的に評価している（B）．決める上での影響は，「よくあてはまる（◎）」が 33.3%，「ある程度あてはまる（○）」が 50.0%，「あまりあてはまらない（△）」が 16.7% でこちらも 8 割程度が肯定的である（C）．学生たちは，進路確定に至る過程において，臨地実務実習の経験が何らかの形で生かされたことを広く認めているといえる．

しかしながらこのことは，臨地実務実習が常に充実感を伴って経験され，いつも“適職”との出会いをもたらすことを必ずしも意味しない．実習の意義が多岐にわたることは表 1 でも確認したが，6 週間におよぶ実習Ⅱでは，学生たちはより多くのことを経験し，時に悩み，模索していた．表 2 に示した語りの要約（A）から浮かび上がるのは，実習先での負荷の高い仕事や期待とは違った仕事で苦労する姿や，「本当にこの道を選んでいいのだろうか」「これは自分のやりたいこと／できることではないかもしれない」「自分が何をやりたいのかわからなくなってきた」などの迷い・不安を抱くようになった姿である．入学前から志望していた業種で実習を行い，実習を通してその志望が確信に変わっていくように見られる学生①のようなケースは極めて少数派である．ただし，たとえそうであったとしても，実習での個々の多様な経験は，卒業までの間に，多くの場合満足のいく進路決定に向けて生かされていた．

4.4　小括

臨地実務実習は，専門的職業分野の真正な場で実際に業務を経験することを通して，当該分野への理解を深めそこで働く自分自身にも目を向ける機会となっていた．実習Ⅰは期間が短いものの，学生たちを初めて実地で観光業界へと参入させる場を提供していた．期間が長く経験の深度も高い実習Ⅱ・Ⅲでも，さらに業界の職業知識・技能を実地で継続的に学ぶ．業務内容は個々の学生が選択した実習先によっても異なり，事前にキャンパスで学んだ知識・技能の適用や応用では必ずしもなかった[3]し，実習は成功体験を積むだけの場でもなかった．学生たちは，飛び込んだ実習先で経験した苦労や充実感や省察の成果をリソースとして，自らの将来について継続的に検討していく．業務内

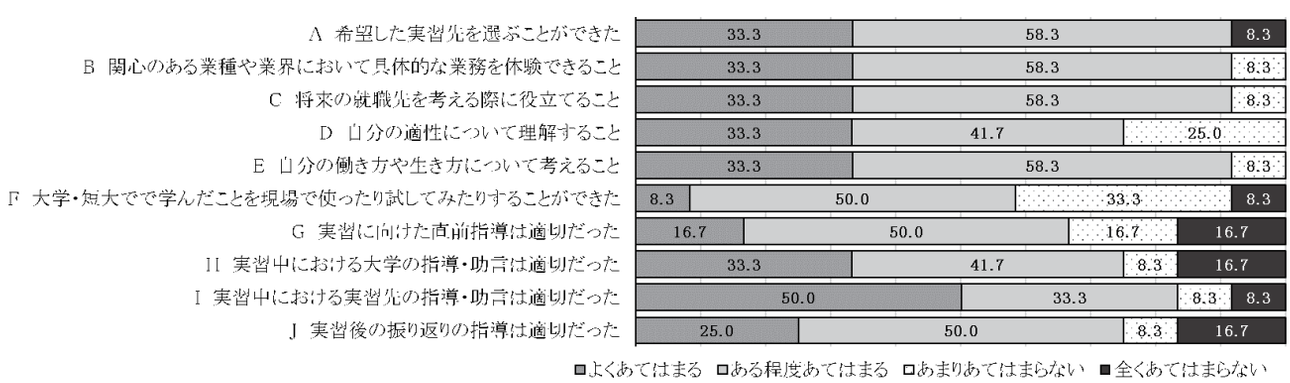

図 5 ：2 年次終了時の臨地実務実習への評価（%，すべて n=12）

表２：卒業直前期の臨地実務実習および決定進路への評価と２年次インタビューでの語り

学生	インタビュー調査(2年次)	3年次質問紙調査					
		臨地実務実習		就職先(内定先)について			
	(A) インタビューでの語りの要約	(B) 進路や就職先を考える上で影響があった	(C) 卒業後の進路や就職先を決める上で影響があった	(D) 決定進路	(E) 観光に関わる仕事である	(F) 臨地実務実習の実習先である	(G) 満足度
①	入学前からエアライン志望で実習Ⅰ・Ⅱともに空港での実習(実習Ⅲもその予定)．実習Ⅱでは2日ほどの集中的な研修を受けて職員同様の業務を一通り経験．現場職員の日々のシフトやローテーションのパターンなどもわかってきたことで，そこで働く自分もイメージでき，仕事・職場として「面白い」と感じた．高校時代の志望から始まり，それが今だいぶ固まってきた．	◎	◎	正社員	観光関連	実習先	◎
②	鉄道業界を志望して入学．実習Ⅱは鉄道会社で鉄道業務，本社内での業務，テナントビル業務など一通りを経験した．実習自体がきつかったということはないが，仕事を経験し，勤務時間や待遇などを自分なりに調べていくなかで，自分の将来に迷いも生じるようになった．実習先で担当してくれた方からも「大変だよ」と聞いた．鉄道が嫌になったわけではない．	◎	◎	正社員	観光関連		◎
③	実習Ⅱでは旅行代理店で各種業務を経験し企画は特に難しかった．経験を経て自分にはデスクワーク中心よりも「動ける仕事」が合っているのではないかと感じている．もともと地域振興に関心があり，大学で学んでいることが生かせる仕事に就きたいと思っている．出身地に戻っての就職一択から変化してきて，高松での就職も視野に入ってきた．	◎	○	正社員	観光関連		◎
④	子どもと関わる仕事に関心があったが保育士志望ではない．観光のなかで結びつけられないか考えている．実習Ⅱでは観光施設を経験したが1日中受付業務が続きちょっと苦しかった．子どもも来たが期待したようなコミュニケーションはなく，将来について何か見えてきたということもなかった．実習Ⅲは別の実習先になったのでそちらに期待している．	○	○	正社員		実習先	◎
⑤		○	○	正社員	観光関連		◎
⑥	実習Ⅱでホテルを選択したが，そこは小学生などの体験活動を重視していた．事前に分かっており楽しくもあったが，思った以上に大人相手のホテル業務，接客業務ができなかったことに不満が残った．同じ場所での実習Ⅲでは通常の接客を経験したい．ホテル業務の適性はまだ判断できず非接客型の観光業もいいかなと思っている．勤務場所は重要で高松市がよい．	◎	◎	正社員			○
⑦	実習Ⅰではホテルを経験し，実習Ⅱでは見ておきたかったDMO(観光地域づくり法人)を選択．専門的なことが多くあまり手伝えることがなかった．基本的に見ていることが多く，そのほかは大量のコピーをしたりオンライン会議を見させてもらったりした．もう少し自分から動けたらなと思っている．実習Ⅲも同じ場所だがツアーガイドなど少し違うことをするかもしれない．	○	○	正社員	観光関連		○
⑧		○	○	正社員	観光関連		○
⑨	実習Ⅱをホテルで行った．自分ではこなしたと思っても認められないということがあり，「積極性がない」というような指摘も受けた．自分としては直せないなという思いで，嫌だなという気持ちで実習を過ごしていた．実習Ⅲも同じ場所で本当に行きたくない．ホテルへの就職はもう嫌だが接客業は希望していてテーマパーク系がよい．それ以外には，もう何がしたいかよくわからない．	○	△	正社員	観光関連		○
⑩	実習Ⅱの旅行代理店での業務は国内旅行の取り扱いが多かった．コロナの影響もありインバウンド向けの業務も思ったほどはなく，期待と違っていた．企画業務も経験させてもらったが，添乗で外に出たり遠くに行ったりする仕事は合わないかもという印象をもった．今後について具体的な志望は未定だが，実習では経験していない、ホテルなどもいいのではないかと思い始めた．	○	○	正社員	観光関連		△
⑪	コロナで県外に出るのを断念して入学した．実習Ⅱでは空港勤務を経験した．グランドスタッフの接客業務を色々と経験し1日だけ滑走路の見学をした．やってみて楽しかったがそれは実習生としてであって，本当の社員としてやるとしたら責任が重すぎて無理だと思った．就職活動については第一志望は空港ではない職場を考えているが，受かりそうにない．	◎	◎	正社員	観光関連	実習先	×
⑫	実習Ⅱでは観光施設で受付・販売業務を担当したがそれがずっと続いたことで非常に残念な思いをした．コロナが理由で同施設の親会社での業務を除いた形での実習Ⅱになったと聞いた。実習Ⅲではそこが改善されているとよいなと思っている．ただし実習Ⅱでも，週に1回程度，実習担当の方から価格設定や経営戦略のお話を聞く時間があり，そこは非常に楽しかった．	◎	△	未定			

※Ｂ・Ｃ・Ｇの◎は「よくあてはまる」，○は「ある程度あてはまる」，△は「あまりあてはまらない」，×は「全くあてはまらない」を表す．Ｅ・Ｆの空欄はそれぞれ「非観光関連」，「非実習先」を表す．⑤⑧の学生はインタビューに回答していない．

容等について実習前の情報提供の充実を求める声もあったが，実習先の選択から実習本番，実習後の振り返りに至るまで，過半数の学生が肯定的に評価していた．

これらの成果が，決定進路への満足度の高さにも表れていると考えられる．もちろんそれは教育課程全体および教職員の３年間の指導・支援総体の結果であるが，学生たちが自ら評価しているように，臨地実務実習が提供した機会は進路決定を様々な角度から後押しするものだったといえる。

5　結論

本研究では，創設期のせとうち観光専門職短期大学の学生を対象に，教育・学習の実態を就職というゴールを視野に入れつつ，実力認識の変容と臨地実務実習のインパクトという点から検討してきた．３年間のパネル調査を通じた考察からは，以下の３点が明らかとなった．

第１に，３年間の変容を個人ではなく集団としてみた場合，学年進行に応じて学生の学習熱心度や科目への満足度が維持・上昇する点が確認された．多様な背景や動機を持って進学した学生が，取組状況や満足感を損なうことなく３年間完走できたことは，教育課程や教職員の指導の一定の成果を示している．一方で，一部の学生においては，年次が進行する過程で満足度や教育内容の役立ち度に対する評価が低下する傾向も認められた．在籍中の何らかの経験がトリガーとなり不満等に繋がる場合，時宜を逃さない気づきや支援が必要となる．また，３年間の学びを通じて評価に関わる基準自体も学生の中で変容する．学生が自己をより客観的・批判的に捉えられることは重要な教育成果でもある．調査結果をそのまま解釈するのではなく，教育を実践する教員と往還した深い考察が求められる．

第２に，学生の能力実感は一方向的な変容を示さず，３年間で相当揺れ動いていた．教育課程の影響が大きいと推察される「将来の職業分野が抱える課題をみつける力」は，１学年終了時に一定の獲得感があると向上や就職に繋がるケースが確認できる一方，１学年終了時点の獲得感が不十分だと，その後の回復は困難な傾向にあった．これに対し，単純な積み上がりが想定しにくい「自己を理解する力」「キャリアをプランニングする力」は，学習や就職活動の過程で学生の自己評価基準が再構築され，認識の変容はより複雑であった．これらの能力は入学当初から高いとは限らない．そのため当初の評価は高くなくても，その後肯定的な評価に転換できれば，学びを活かした就職へと結実していく．学生の認識がどのタイミングでどちらにシフトしたのか．それを見逃さない指導が求められる．

第３に，専門職大学・専門職短期大学制度の特徴である臨地実務実習は，経験する回数だけでなく時期も長期に渡るため，学生に大きなインパクトを与える学びの場となっていた．実習Ⅰは当該職業をまずは知る契機となり，続く実習Ⅱ・Ⅲは，自己の適性や志望を内省しキャリア選択を具現化する場として機能していた．観光関連の業界や仕事といってもその裾野は広く，入学時の将来展望はイメージ依存でもある．元々の将来展望が確信に至るケースは少なく，多くの学生は迷いや不安を経験しながら将来の仕事を模索していた．一方で，長期実習の内容を大学がコントロールすることの難しさもあり，在学中の学びとの連関の希薄さや，実習前後の指導や情報提供に対し一部否定的な評価があることも明らかとなった．個々の学生の状況に寄り添い，背中を押す指導体制・内容のさらなる充実・強化が求められる．

以上は，創設期という特殊な時期に入学した層の３年間の変容を追跡した結論に過ぎないし，学生の主観的な回答に依拠した解釈に留まる．入学年度の異なる学生においても同様の傾向にあるのか，日々学生の指導や成長と接する教職員の認識との一致・齟齬がどこまであるのか，継続的なデータ収集と分析，そして実践者との実りある対話が必要である．

謝辞

本研究におきまして多大なるご協力を賜ったせとうち観光専門職短期大学の教職員の皆様と，複数回にわたり調査にご回答いただいた学生の皆様に心より御礼申し上げます．なお本研究は JSPS 科研費 20H01697 の助成を受けたものです．

注

1）「将来の職業に関連する知識や技能」，「将来の職業分野が抱える諸課題をみつける力」，「専門分野の知識・理解」，「論理的に文章を書く力」，「相手にわかりやすく話す力」，「外国語の力」，「ものごとを分析的･批判的に考える力」，「幅広い知識，ものの見方」，「自身のキャリアをプランニングする力」，「人間関係をつくっていく力」，「自己を理解する力」，「自己を管理する力」の計 12 項目を尋ねている．これらの項目は，専門職大学・専門職短期大学として重視すべき力や既存の学生調査で尋ねられている力，また，キャリア教育上で重視される基礎的・汎用的能力などを参考に設定した．

2）全体の回答傾向も掲載しておく（図 6）．注目すべきは，第１学年の際に各能力に対して「十分」と答えた者は「自己の理解をする力」の一人を除いて誰ももいない，という点である．その意味では，現時点から振り返れば，こうした能力実感を伸ばしていくことが第２学年，第３学年での教育課題であった，と捉

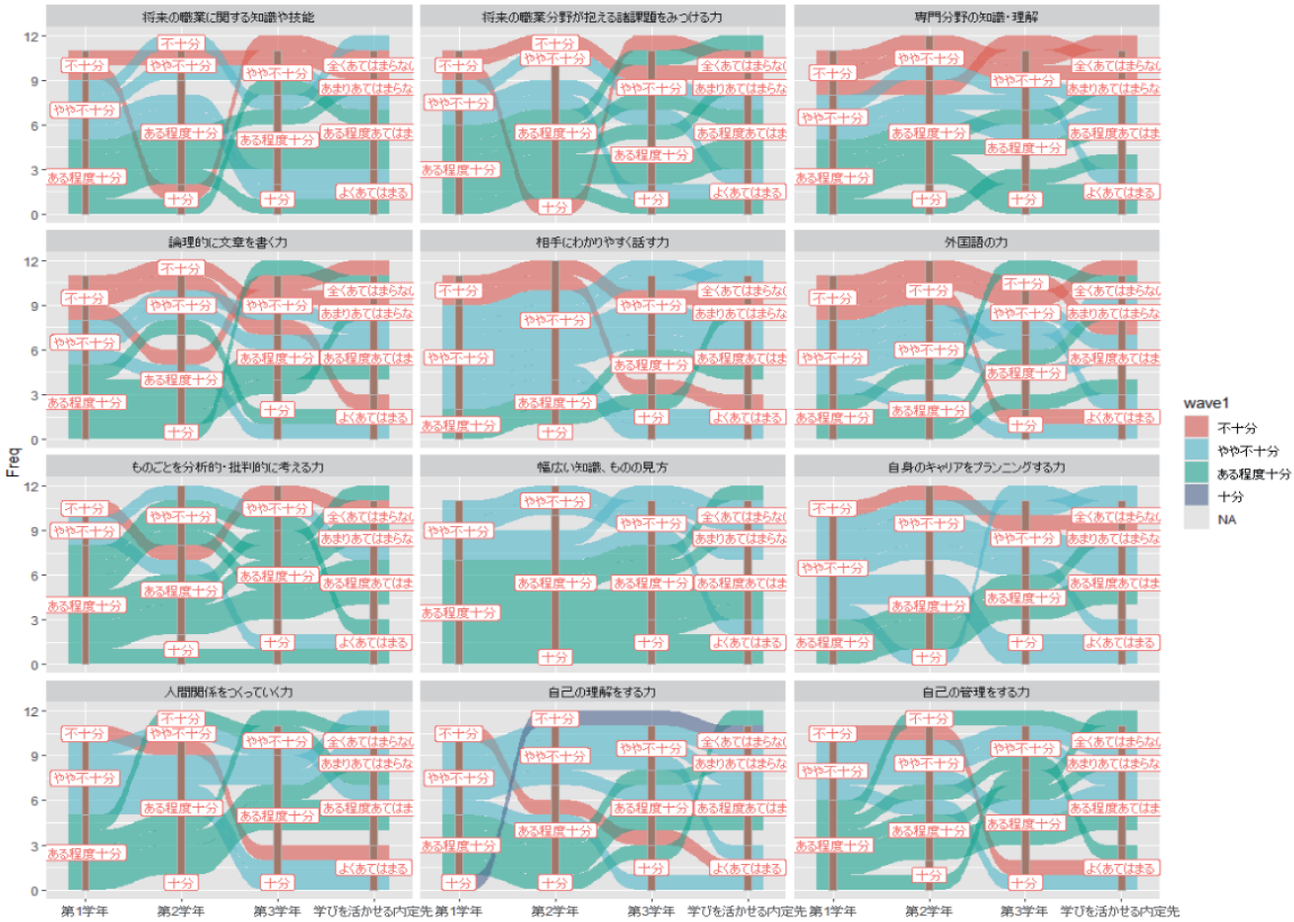

図６：12 の能力及び就職先に対する評価にかかる沖積図

えることもできる．

3）この点は観光分野を含む非資格系分野の臨地実務実習の特性である可能性がある．資格系の場合，例えば医療的なケア等を行う保健系専門職の臨地実務実習では，事前にキャンパスで学んだ知識・技能の適用がより重視されるはずである．

文献

小方直幸・谷村英洋・立石慎治 2021「専門職大学・専門職短期大学の教職員組織と教育課程」『九州大学教育社会学研究集録』21: 63-82.

小方直幸・立石慎治・谷村英洋 2022「専門職大学・専門職短期大学の教職員組織と教育課程――2021 年度開設校に着目して」『大学経営政策研究』12: 277-291.

小方直幸 2024「専門職大学制度の船出――星群としての眺め，恒星としての現在地」『IDE』666：39-44.

合田美稀 2024「観光産業に対する学生のイメージ変化についての考察――対応サンプルによるノンパラメトリック検定を用いて」『観光振興研究』4(2): 12-19.

濱島朋子 2024a「観光学部学生のキャリアデザインの課題と展望――和歌山大学観光学部での調査から」『観光振興研究』4(2): 1-11.

――― 2024b「観光産業に対する学生のイメージ変化についての考察――対応サンプルによるノンパラメトリック検定を用いて」『観光振興研究』4(3): 27-40.

山川伊津子・大橋由紀子 2022「動物看護専門職短期大学生への動物看護職に対するイメージと職業への意識調査」『動物研究』4: 33-44.

――― 2023「動物看護専門職短期大学生への動物看護職に対するイメージと職業への意識調査――1 年次から 2 年次の変化を中心として」『動物研究』5: 25-35.

山崎薫 2020「大学と専門学校と専門職大学：ヤマザキ動物看護専門職短期大学の意義」『大学マネジメント』16(3): 20-25.

（受理日　2024 年 12 月 11 日）

小方直幸（香川大学・教授）

E-mail: ogata.naoyuki@kagawa-u.ac.jp

立石慎治（筑波大学・助教）

E-mail: tateishi.shinji.gw@u.tsukuba.ac.jp

谷村英洋（帝京大学・講師）

E-mail: hi.tanimura@main.teikyo-u.ac.jp